

「青年ドイツ派」研究覚えがき

小野寺直樹

(1)

私は当然のことながら東西ドイツの現状に強い関心をいただいている。周知のように、ドイツは今世紀の2度にわたる世界大戦に率先して主役をつとめた。ことに、ヒトラーの第3帝国による第2次世界大戦においては、反ユダヤ主義、反共産主義、ドイツ民族至上主義のナチズムを、まさに全国民あげてのファナティックな実践によって世界史の上に、新たに永久に消しがたい一大汚点を記録した。それにしても、ナチ党の大量のユダヤ人虐殺というこの上なく非人道的行為にたいして、同じドイツ民族のなかからはとくにこれといった抵抗運動をおこしえなかったという歴史的事実には、この民族の伝統的な体質を知るうえでさらに注目しておかなければならないことであろう。

さて、第2次世界大戦に徹底的な敗北を喫して、やがて1949年には「ドイツ連邦共和国」としての西ドイツ、数カ月おくれてそれに対抗して「ドイツ民主共和国」としての東ドイツの二つのドイツが、それぞれことなった政治体制のもとに誕生を余儀なくされて以来すでに20年を経過した。敗戦後のドイツはたしかにいわゆる戦後の東西冷戦の不幸な犠牲者ではあったが、高度の文明国でありながらいまだに統一国家を実現することもできず、それどころか最近ますますそれが遠のいていくように思われる。私は今春つまり1969年の春、短期間ながら西ドイツを中心にヨーロッパの国々を実際に体験し、そこに生活する人々の日常にじかに接してみて、ドイツにもっとも強く感じたことはなにかといえば、なんともいいようのない無気力の瀰漫ということであった。もちろん私の体験はごくせまく一面的なものであり、これはあくまでも私個人の主観にとどまるものではあるが、私のこのような直観の由来するところは、とりわけドイツの今日なおひきつづいている国内および国際関係の異常さと無関係ではないであろう。西ドイツは経済的には敗戦後のまさにどん底の状態からいわゆる奇跡的復興を実現し、その後もドイツ民族の特性にささえられて今日では西ヨーロッパ随一、否、世界有数の強国でありながら、一方で国際政治の舞台ではいまだに国連にも加盟できない、つまり後進国以下の状態をつづけているのであり、国全体としてみるとひどく片ちんばな存在である。一体このようなみじめな状態から、ドイツはいつま

た正常に復すのであろうか。

そもそも、ドイツは近代史上いわゆる市民革命に成功せず、近代的統一国家の実現をみたのはずっとおくれで1871年であり、しかもこれは権力のがわからの、つまり上からの統一であった。この歴史的事実はまさにドイツ的であり、その後のドイツの命運を左右するものとしてつねに銘記しておかなければならない。国家的統一の以前からすでに、国家の秩序をみださず上からの統制に無批判的に追随することが、ドイツの国民性としてしだいに定着しつつあったといえるが、統一以後はいよいよその特性が顕著となり、ついには第3帝国の悲劇をも招来した。西ドイツに関するかぎりでは、ドイツ民族のこの伝統的性格が建国以来今日までの20年間においても、さまざまな形で戦後民主主義体制の基本にマイナスに作用し、それをまさにドイツ的にいびつにしてきているということである。ドイツの当面している問題はかくして根深いといわなければならないわけである。⁽¹⁾

(2)

しかるべき市民社会を実現することもなく、ドイツの近代化はきわめて不完全な形をたどらざるをえなかったことは上述したとおりであるが、そこから生みだされたドイツ近代文学を眺めてみると、これも当然のことながらひどく不幸な形態を示している。その全体像をここに述べるわけにはいかないが、1832年のゲーテの死をさかいに、ハイネのいういわゆる「芸術時代」がおわりをつげ、そのあとに新しい形式と内容をもとにした新しい文学が芽をだし、やがて花ひらくはずであった。しかし、とくに1848年の3月革命の失敗は文学にも決定的に作用し、ハイネなど少数の詩人作家の偉大な例外があるにせよ、全体としてははげしい政治的・社会的抑圧に屈し、諦念して自己のなかにとじこもり、現実のドイツのみじめさから逃避したところで、個々バラバラにひそかな花をさかせるばかりである。もっとも、3月革命はみじめな不成功におわったけれども、ことに1830年のパリの7月革命以来、新しい時代を目ざして「自由」を旗じるしとし、みじめさにあえぐ民衆とむすびつく新しい文学運動が、そう強力なものとはなりえなかったにせよ、当時のドイツにもあることはあった。1830年から1848年までのドイツ文学の主流を「3月前期」の文学と名づけるとすれば、その前半になっているのはいわゆる「青年ドイツ派」の文学運動である。ベルネとハイネはその先駆者であり、ハイネはさらにこの文学運動の粋をはるかにとびこえて偉大な近代的詩人として世界文学に仲間入りするが、グツコー、ラウペ、ヴィーンバルク、ムント、ヴィルコム、キューネといった作家評論家をふくめての「青年ドイツ

派」全体にたいしてのドイツ文学史上での評価は、従来はもとよりのこと、今日でも軽く見すごされがちである。そしてこのことがしばしば故意になされてきているところに、看過しえない重大な問題がある。もとより、「青年ドイツ派」の文学作品そのものが、それまでのドイツ文学史上のゲーテ・シラーに代表される偉大な時代のそれと比べて、芸術的なかおりには見劣りがするにせよ、それ以上に自由思想を鼓舞し、フランスという外国を賛美しおまけに時の政治体制を批判して社会的秩序をみだすようなことをしたことをもって、そのような文学者および文学作品を否定的に評価しようとする体質がドイツおよびドイツ人のなかに歴史的に存在する。このことに注目しなければならない。

いずれにしても、今日までドイツにおいて大勢としてはこの「青年ドイツ派」はいまだ積極的な評価をなされているとはいえない。しかし、文学史のなかに定着するまではいかないけれども、積極的にこの派の文学活動を取りあげた人たちもいなかったわけではない。そのなかではすでに前世紀に、G. ブランデスがいる。彼の主著「19世紀文学主潮史」(1871~90年)のなかの「青年ドイツ派」はその後のこの派の研究にとって古典的な価値をもつものである。この点は今日でもなんら変りない。ブランデスの著作では「青年ドイツ派」としてふつうよりより広汎にとりあつかわれている。「さて、かかる事情および影響のもとに、1820~1848年代のドイツの反抗文学は始まった。精神的創造のかくも大きい団塊を概観するさいには、その時代およびその国の人々はいかに感じまた考えたか、かれらの文化はいかなる色彩で人目をひいたか、かれらの期待および願望、かれらの人類愛および自由愛、かれらの法律観および国家思想はいかなる形式をとったか、最後に、かれらの趣味はいかなるものであったか——すなわちこれらはいやしくも傾聴されんことを欲し、生々した興味を与えんことをねがうものの書かねばならぬことであるが——これらの消息を一般に多数の文献のなかに探しもとめるのがふつうである。このようにすれば、この点に関するわれらの歴史的知識欲は満たされるのである。」

今世紀の初頭にはH. H. フーベン⁽²⁾がいる。かれはとりわけ「青年ドイツ派」の原資料の収集整理者として忘れられない存在である。大作である「青年ドイツ派のシュトゥルム・ウント・ドラング」(1911年)は、F. メーリングに批判されたものではあるが、最近復刻が予定されており、これからの研究にも欠かすわけにはいくまい。また、かれの編集した「ハイネ対話録」もハイネ研究にとって貴重な存在である。

さて、第2次大戦以後はしばらくの間「青年ドイツ派」についてのモノグラフィーはあまり出ていないようである。1957年になって、W. ディーツェの「青年ドイツ派

とドイツ古典主義」が東ドイツから出され、これが今日においても質的にも量的にも第2次大戦後の最大の本格的な研究書であろう。この書の緒言の冒頭を見ただけですでに、著者の「青年ドイツ派」研究への並々ならぬ意欲のほどが明らかに感じとれる。「未開拓の領域では発見は容易である。誰でも周知の領域には、いくつかのこれも周知のポイントが決まっています、そのポイントに立てばその一帯が見わたせるようになっており、それと同時にあたり一面意味ありげに整理されていて、まるで全体もまたその部分部分も知りつくされているのだといわんばかりになっている。……だが、見かけなどというものはあてにならないものだ。もし、新たなそして純粋に学問的・客観的な見かたをしてみるならば、骨はおれるが掘りおこさるべき新しい事実が発見されて、そのよろこびはこのうえなく湧いてくることであろう。古い領域のなかの新開拓の領域が見えてくる……」⁽³⁾ ディーツェのこのような研究態度は、教えをうけた H. マイヤーからうけついだものであることも、この緒言のなかに明言している。このディーツェの研究書は、F. メーリングにつながるマルクス主義的文学観の立場に立ちながら、メーリングの「青年ドイツ派」観を学問的に訂正している。メーリングほどの人物にしても、「青年ドイツ派」を1835年のドイツ連邦議会の決議にもとずく官憲のデッチあげたもので、なんら文学的集団などではないのだとする「伝説」にしたがっていることにたいして、ディーツェは実証的に「青年ドイツ派」なる文学運動が当時おこりつつあったことを明らかにしようとつとめている。さらにディーツェの研究の他に見られない特色として、「青年ドイツ派」の文学運動を1840年代以降へと止揚していく、いわばこの派の新エースとして若きエンゲルスの文学面での位置づけを試みている。もとより、エンゲルスは思想家であって文学者としてはごく若いころにかぎられてはいよう。しかし、「青年ドイツ派」とエンゲルスの関係は浅からぬものがあることも事実であり、この間の研究も今後もっとなされていくべきであろう。この面についてのモノグラフィーには、チェコスロヴァキアの V. マチャーツコヴァによる「若きエンゲルスと文学」（1961年）が今のところ唯一の貴重な存在をなしている。もっとも、エンゲルスに関して最近日本で公刊されたもののうち、広松 渉の「エンゲルス論」（1968年）は著者の独創的なエンゲルス研究の第一部となるもので、学界でも注目を浴びているものであり、ここでは3月革命までの若きエンゲルスがあつかわれている。当然、「青年ドイツ派」との交渉がのべられており、著者の広く克明な資料の探索と独自のするどい着眼点とからするこの若きエンゲルス論には、「青年ドイツ派」研究にとっても教えられるところが少なくなく、貴重な研究書といえるだろう。

(3)

1966年に西ドイツのレークラム文庫の分厚な一冊本として、「青年ドイツ派——作品と記録集」が刊行された。その中味は、それぞれの題目をたどってみると、「7月革命」にはじまり、以下「敵対するものと対立するもの」、「この運動のヒーローたち」、「美学上のこと」、「旅行文学」、「モラルの問題」、「信仰の問題」、「政治上のこと」、そして最後に「青年ドイツ派についての同時代の評価」という分類がなされて、それぞれについて相当広いはんにわたって作品その他がとりあげられ、まことに手ぎわよく編集されている。この書の編者はJ.ヘルマントで、巻末に付されている編者の後記は意欲にみちた堂々たる論文となっていることからしても、この分厚い一冊は単なるお座なりな過去の細切れの紹介などではなく、これまでドイツ文学史のうえで余りにも軽視され、否むしろ蔑視されてきた感のあるこの「青年ドイツ派」を、ここで新たな観点から評価しなおす必要のあることを、勇敢にそして説得的に世に問いかけ訴えたものであって、その意味において全体が学問的にすぐれた労作となっている。上述の編者による後記は一面では当然ながらまた大変まとまった「青年ドイツ派」案内にもなっているので、以下に論旨をたどって紹介してみたい。

「青年ドイツ派」は1830～1835年という短期間の世にうけ入れられた時期をすぎると、それ以後はドイツ文学のなかでつまはじきものにされて今日におよんでいる。ことに反自由主義的・芸術至上主義的な側からは、この派の代表たちは単なる文筆業者にすぎないとか、革命家きどりをしてみたところで、その文学上の無能なことが明白なエピゴネンもしくは傾向作家に仕立てられてきた。そして今日においても、全体的にみてこの派の文学運動は、いわゆる「不快な」文学という考えかたをされつづけているのである。マルクス主義的文学観による東ドイツでの評価にしても、エンゲルスの見解にしばられて積極性に欠けている。そこで、ぜひ今一度この派の文学者たちを正當に評価しようではないか、つまり、かれらは7月革命の文学者たちであり、それと同時に当時のすべての自由主義的な作家たちを開放の精神によって結びつけるべく潤滑油の役割りを果たした文学者たちだということにおいてである。

さて、このような「青年ドイツ派」を正しく評価するためには、できるかぎり広い背景において見ていかなければならない。「青年ドイツ派」とは大まかないいかたをすれば、政治的・宗教的および道徳的自由をもとめて急激にもりあがってきた「時代精神」といったものの文学的表現であり、時あたかもメッテルニヒ体制の大反動のもとにあって、自由を指向する動きは徹底的に弾圧される状況のなかから、民衆の心に

「青年ドイツ派」研究覚えがき

しだいに不満の気持がうっ積していったという政治的・社会的背景を考えあわせるならば、この派の運動はある種の必然的な「公然たる反抗の予備行動」といったものと見てとれるのである。この派の文学的表現形式はといえば、それまでのような「詩作」中心ということではなく、時代の状況に即した形式つまり「散文」中心であった。エッセイあり、手紙形式によるもの、ジャーナリズムを介しての雑文、あるいは旅行記の体裁がとられた。このような形式による作品にはほとんど完結などということはない。このたぐいの断編による文学の効果は、いってみれば小粒でもピリッと辛いといった手合いであろう。「青年ドイツ派」のいない手たちは大てい、民衆の生活にうとい文学者などではなく、活動的なジャーナリストとして自任しており、したがってかれらの文筆活動の対象も、いわゆる文学愛好者の枠をこえて一般民衆であり、意識してそのような対象にふさわしい書きかたをしたのであった。

「青年ドイツ派」の上述のような散文形式は、また当時のきびしい検閲の網の目をくぐることにその目的はあったのである。この派の文学者たちの目は終始警察国家に相対しておった。1830年代はまさに検閲の暴力から逃れるなどということはできない状態であったし、したがって「青年ドイツ派」の文学活動はいってみれば、文学的ゲリラ活動であった。1835年12月10日のあの悪名高いドイツ連邦議会の著作活動禁止措置以前に、ラウベの「旅行記風短編集」、ムントの「マドンナ」、グツコーの「ヴァリー」、ヴィーンパルクの「美学的遠征」などはすでに発禁にされていたのである。

「青年ドイツ派」の文学活動のなかでもっとも大きな位置をしめるのは、いうまでもなく政治を題材とするものである。その根底をなすものは自由主義思想であり、自由への欲求である。ジャーナリストとしての観点に立てば、それは具体的には言論活動の自由、表現の自由を意味した。かれらの意図したところは、詩作よりもゲルヴィエヌスのように政治的な「行為」にあった。とはいっても、自由を求めて具体的にどのような行為をとったらいいかということになると、このことはむずかしいことであった。

ドイツの統一国家の実現への願いということでは、かれらのなかにはどちらかといえば余り見られない。この点については、「青年ドイツ派」のなかではとくに見解に幅広いものがあり、一方ではいわゆる共和制をむしろ良しとするものがかなりおるかと思えば、他方では平等の権利義務にもとづく立憲君主制に賛成するといった状態であった。

結局この派の文学者たちに一致したことといえば、社会のみじめさを救う万能薬と

しての「自由」への欲求ということに限られた。そして、すべての自由主義者たちに共通するパラドックス、つまり自由ということによって平等も実現するといった幻想をもつことでは「青年ドイツ派」としても同様であった。社会的な問題への関心よりは、観念的な自由への思慕が中心であった。急ピッチで工業化が進みつつあったイギリスやフランスにくらべると、ドイツはいぜんとしてメッテルニヒの反動下にあえぐみじめな農業国であって、このような状態のドイツにあっては、自由というものも実際には市民にとっていまだ無縁のものであり、観念のなかに止まるしかなかったのである。

さて、1840年代になるとより若くてよりラジカルな作家たちに論難を浴びるようになるが、なかでも1842年のエンゲルスの一文（A. ユングと青年ドイツ派）がもっとも痛烈ないいかたになっている。しかし、こうした40年代の旗手たちは、「青年ドイツ派」について少し過大な要求をしていないだろうか。なぜなら、「青年ドイツ派」とは究極のところ、精神的にも政治的にも、初期自由主義の基盤の上に立っていたことに間違いはなく、この面からなしうるあらゆることを実行すべくつとめたのであったからだ。ところが、「青年ドイツ派」は不要なものと一緒にたにされて捨て去られ、1850年代にはすでに古くさいものとなってしまったのである。ただ一人ハイネのみ例外であったが、そのハイネもまた1900年以降しだいに姿を消してしまったのである。

×

×

×

以上が、編者ヘルマンの「青年ドイツ派」についての所説である。繰り返して記すが、編者は「青年ドイツ派」の文学活動を正当に再評価することを主張している。誤解を生じないようにここでつけ加えておかなければ、編者は「青年ドイツ派」の文学上の諸欠陥を充分に認めたくえでの主張だということである。したがって文学的に過大な評価も一方で厳に慎まなければならないだろう。結局19世紀ドイツ文学における自由主義的文学運動が、全体からみると余りにも少なすぎる点からみていくなれば、いろいろな欠陥があっても、「青年ドイツ派」はやはり1830年代の貴重な文学運動としてそれなりに無視できないということになるのではなかろうか。

編者ヘルマンはブランデスの遺産を正しくうけついでいるといえよう。かれは翌年、つまり1967年にやはりレークラム文庫の一冊として、「青年ドイツ派」の丁度姉妹編のような形で「ドイツ3月前期——作品と記録集」を世におくった。ここでは1840年代の作家とその作品をあつめている。さらにその翌年1968年には「1775～1795年のドイツ共和国について」を編集し、インゼル叢書として2冊に分けて公にしてい

「青年ドイツ派」研究覚えがき

る。この叢書の青色のカバーの裏に出ている編者についての簡単な紹介文によれば、J. ヘルマンは1930年カッセルに生まれ、どこの大学か不明であるが、ドイツ文学・歴史・芸術史を専攻、1958年以来アメリカのウィスコンシン大学で近代ドイツ文学の教授の職にあるとのことである。そして今年1969年に「マインツからワイマルへ——1793～1919」として、ここ数年来の論文にさらに未発表の数篇を新たに加えて一本とした評論集を公刊するにいたっている。ここには既述の「青年ドイツ派」および「ドイツ3月前期」のそれぞれの後記も若干の書きなおしと、さらに詳細な註を新たにつけ加えて転載されている。この書に接してみて、「青年ドイツ派」研究についてさらに一言付言するならば、著者は当然のことながら、「青年ドイツ派」を近代ドイツ文学の自由主義的・革命的指向の流れの一環としてみごとにとらえ位置づけているということである。このような研究方法は今後の研究に貴重な示唆を与えたものといえよう。

注。(1) この点に関しては宮田光雄「西ドイツの精神構造」(岩波書店、昭和43年)に詳しく研究されている。

(2) G. Brandes: "Das junge Deutschland." Hauptströmungen der Literatur des neunzehnten Jahrhunderts, Berlin 1924, 引用は茅野蕭々訳「青年ドイツ派」(春秋社、昭和5年)31-32頁による。なお用語は現代風に改めた。

(3) W. Dietze: Junges Deutschland und deutsche Klassik, Berlin 1957, s. 5

(おの でら なおき 本学助教授 ドイツ語)